

『国姓爺明朝太平記』の方法

— 近松と其磧との間 —

倉員正江

- 一、『翁草』に見える近松と其磧評
- 二、饗庭篁村の其磧評
- 三、「国性爺」ブームの到来
- 四、「国性爺」・「後日」の評判
- 五、『明朝太平記』における国性爺・甘輝像
 - 1 国性爺の人物像
 - 2 甘輝の人物像
 - 3 三段目の改変
 - 4 演劇と浮世草子の間
- 六、『明朝太平記』と「後日」の關係
- 七、『闘記』の構成と『明朝太平記』
- 八、『明朝太平記』の意義

《論文要旨》

八文字屋本の代表的作者江嶋其磧は、当時近松門左衛門と併称される人気を誇った。近代以降井原西鶴の再評価に伴い、亜流と見なされた其磧の評価は不当に低下した。しかし模倣やコピーの氾濫は成熟した文化の産物である現実は、商業出版隆盛の当時も今も変わらない。近松の時代浄瑠璃の代表作「国性爺合戦」・続編「国性爺後日合戦」と、「国性爺」ブームに刺激されて書かれた其磧の『国性爺明朝太平記』を比較すると、両者の相違が顕著に窺われる。其磧は安易に浄瑠璃や歌舞伎の見せ場に頼ることを廃し、長編小説としての構想を首尾一貫させることに腐心した。「国性爺」最大の見せ場三段目を改変し、寛仁大度の甘輝將軍像を強調している。さらに「国性爺」の粉本となつた通俗軍書『明清闘記』を利用して、長編浮世草子に新機軸を打ち出したのである。

一、『翁草』に見える近松と其磧評

京都町奉行所与力で淡々門の俳人でもあった神沢杜口（宝永七年（一七一〇）〜寛政七年（一七九五））は膨大な隨筆『翁草』を遺した。享保年間に青年期を迎えた杜口が八文字屋本に親しんだのは想像に難くない。巻之五十五「新渡加羅并に近松門左衛門の事」に以下のように言う（引用は「日本隨筆大成」第三期『翁草』による）。

また其世に江島屋其磧と云る浮世艸紙の作者有り、是も禁短氣、色三味線、曲三味線、其外何質氣など云ふ草紙に、世のわざの事、又は時の人情を、よく書こなして、今に至て名を遺せり。同じ狂歌ながら、近松は此草紙を書く事難く、其磧は又淨瑠璃を作り得ず、適々淨るりを書けば趣向は面白けれども、人形働らかざりしなり、斯る事にも、其道々に差別有事知ぬべし。

これはまた、其磧自ら淨瑠璃を書いたと言う『役者目利講』（正徳四年（一七一四）正月刊）の口上を裏付ける証言としても注目される。さらに巻之百六「享保年間洛俳諸の噂」にも、以下の如き同様の記述がある。多田南嶺の知友であった杜口にしてこの言をなすのも興味深い。

前に云其磧が事、これはまた南嶺に遙に優れり。其代に淨瑠璃は近松門左衛門、草紙は其磧と、人丸、赤人

の如くに世に賞せり。門左衛門は草紙を不得、其磧が書る淨瑠璃は、淋しくて人形はたらかず、得失は素より有筈の事なり。其磧が書しけいせい禁短氣、色三味線、曲さみせん、親仁氣質の類、自然とのどやかに麗しく、南嶺が文は利口にして心鬧し、何事もたけ高からんこそ物の上手なれ（下略）

加えて『異本翁草』巻十五「○天下第一人女」の項にも次の如く述べる（引用は「隨筆百花苑」十による）。

江嶋其磧といへる有、よく世の情を述、筆勢をさく、近松におとらず。所謂、曲三味線、色三味線、契情禁短氣、はたもろくの容儀類などは今の世の人もこれを翫ぶ。されども淨るりを書く事はならず。近松は又、双紙を作る事を得ず。其差別をいかにといふに、其磧が作文にては人形の働き薄く、近松が草紙を綴れば、文勢過て人情くはしからず、己々が得たる所古今以て同じ。のちの南嶺は其磧を欺くばかりに作意巧なれども、其情進疾して其磧が上に立ん事かたし。（下略）

内容の重複があるが、煩雜ながら三箇所とも引用したのは、それぞれ見るべき部分があることによる。杜口は、淨瑠璃は趣向だけではなく人形の働きが大事で、草紙は人情を尽くすのが大事であると、両者の相違を的確に理解していた。これはまた、淨瑠璃評釈書『難波土産』（元文三年

（一七三八）刊・「新群書類従」六による）に見える近松の言葉「惣じて浄るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句みな働を肝要とする活物なり」を想起させる。其磧と南嶺の比較論はここでは措くとして、其磧の作品が没後も息長く愛好されたことが知られる。八文字屋本は京都の文化であると称して私は憚らない。しかし当時其磧が近松と併称されたことなど、今日一般には看過されている。

二、饗庭篁村の其磧評

『翁草』の記事に注目した明治期の作家饗庭篁村（一八五五―一九二二）は「斯く其嫺（＝杜口）に称されし其磧も西鶴といふ大きな影に掩はれてか「元禄時代」を研究する人々に忘れられたる姿なるは遺憾なり」（博文館『太陽』明治四十年一月号「江島其磧」として、其磧が後代文学へ与えた影響の多大なる点を賞揚した。そして言う「其磧は斯の如く西鶴近松をおのれに纏めて明和天明より文化文政の諸作家に引継ぎたるものともいふべし」と。こうした理解者も存在したのだが、其磧の評価は近代以降西鶴の再評価に伴い不当に低くなつたように見える。

西鶴以降の浮世草子研究の通弊と言えようが、其磧作品の場合も、西鶴の模倣・剽窃箇所を挙げて「通俗化」「大

衆化」を指摘するに終始しがちである。確かに文学研究の一つの方法として典拠探索があるのだが、その場合どうしてもオリジナリティーを評価する、という基準に偏つてしまふ。それを根本から否定するつもりはないが、文化の大衆化やコピー作品の氾濫は成熟した社会の所産であり、何も浮世草子に限つたことではない。八文字屋本は非常に商品性の高い出版物であると私は思う。篁村はまた「其磧は西鶴を體にし近松を用にし八文字屋物と唱ふる物の本の中の本尊と輝きぬ」と、その翻案の巧みさを高く評価した。確かにある種の「分かり難さ」が西鶴作品の魅力の一つではある。しかし、だからといってより「分かり易い」其磧が不当に低い評価を受けるのは、篁村と同様遺憾である。

三、「国性爺」ブームの到来

本稿では、前掲杜口の言にひかれ、近松と其磧の比較を試みたい。其磧作『国性爺明朝太平記』（六卷六冊・享保二年（一七一七）五月洛陽書林刊／以下『明朝太平記』と略す・引用は「八文字屋本全集」六による）と、近松の時代物の代表作『国性爺合戦』（正徳五年（一七一五）十一月大坂竹本座初演／以下『国性爺』と略す・引用は「近松全集」九による）・続編『国性爺後日合戦』（享保二年二月同座初演／以下『後日』と略す・引用は「近松全集」十に

よる)の関係を再検討し、其蹟時代物の特徴を考える端緒としたい。

「国性爺」は足掛け三年、十七ヶ月間の長期興行を記録、すぐに歌舞伎化され浮世草子にも影響を与え、「国性爺」ブームを現出させたことはよく知られる。「明朝太平記」もそれを意識して「国性爺」と「後日」、一部歌舞伎に構想を得ている。和藤内と老一官が獅子が城を訪ねる場面(二)の三)など、行文にも一部「国性爺」の剽窃箇所がある。おおよそ前半三巻が「国性爺」に、後半三巻が「後日」の内容に重なるが、其蹟は執筆の際当然構想を基本的に練り直している。にもかかわらず「本書の筋立てはほとんど原作そのままである」(京・大阪・江戸)各座の趣向や、さらには他の作品の趣向を適当に接取導入したものである(『日本古典文学大辞典』)などといった評価は、辞典の項目という字数制限はあるのだろうが、其蹟の創作意図を無視している。古く藤岡作太郎が「実録物やうの作風に出て、一変化を試みしを多とすべし」(『近代小説史』大正六年初版)と位置付け、後藤丹治が「近松の原作二種と太平記とを巧みに配合する事によつて、この書の仕組の重要な部分を構成した」(『戦記物語の研究』昭和十一年初版)と傾聴すべき評価を下している。長谷川強がさらに、『太平記』よりもむしろ『智恵鑑』を頻繁に利用して詭計を描く点を

指摘、長篇の時代物への志向と、通俗軍談への関心が「国性爺」の上演を機に合一したところに生まれた作である、と適切に論じている。私は従来指摘された典拠に、改めて『明清聞記』(寛文元年(一六六一)鶴飼石斎序/以下「聞記」と略す・引用は内閣文庫本による)を加えたい。後述の如く、其蹟は明らかに「聞記」を実見している。『聞記』は「国性爺」初演当時からその典拠とされ、具体的な影響関係も考証されているが、『明朝太平記』との関連は、従来特に重視されていない。

四、「国性爺」・「後日」の評判

浄瑠璃史における「国性爺」の画期性については、さまざまな方面から論じ尽くされている。歌舞伎についても、「日本の母」と称され継母の義理を余す所なく發揮する国性爺の母親など、演出上の特徴が指摘されている。役者評判記『役者色茶湯』(享保二年正月八文字屋刊・開口は未練作か)と其蹟作『役者賭双六』(同年江島屋刊)の京之巻は、享保元年秋都万太夫座上演の「国性爺」に言及する。甘輝(柴崎林左衛門)、母(よし澤あやめ・番付に役名こやの)、錦祥女(山本かもん)の三人が絡む三段目が最大の見せ場であり、和藤内(神山小四郎)の千里が竹における虎退治の荒事も評判を取った。母役の演技も、大坂の若

女形霧波瀧江が白髪頭に縛られながらの奮闘で新境地を開拓し、好評を博した。評判記から見る限り、三都の芝居とも内容に大差はなく、番付を見ても浄瑠璃をほぼ忠実に舞台化したものと推測される。ただし「後日」は浄瑠璃・歌舞伎ともに不評であったことが知られる。

評判記執筆のため、其蹟は三都の歌舞伎を見尽くしたであろう。しかし、其蹟は浄瑠璃・歌舞伎の見せ場を意外な程『明朝太平記』に継承していない。具体的には、李暉天が自らの左眼をえぐる、呉三桂が自分の子を身代わりに殺す、後述錦祥女と母親の犠牲的自害、九仙山の碁立軍法、などの場面である。『明朝太平記』前半部分で最も改変されたのは、「国性爺」三段目相当箇所（二の三〜三の一）である。単に「国性爺」人気に入乗するならば、変える必要はない。以下『明朝太平記』の特徴を『闘記』の記述を踏まえつつ考察してみたい。

五、『明朝太平記』における国性爺・甘輝像

1 国性爺の人物像

『明朝太平記』における老一官（鄭芝龍）・和藤内（国性爺）・甘輝像は、近松作よりもむしろ『闘記』のそれに近い。『明朝太平記』二の二冒頭に以下の如く言う。

和藤内が父老一官名は芝龍字は微弘。泉州府の晋江県

石井の人。其父を能騰といふ壮年の時より勇を好んで剛強人に超たり。大明神宗皇帝につかへて忠勤をはげみしが。代をしようつて思宗烈皇帝姪業を好み玉ひ。

鄭芝龍が忠諫をにくんで追放し給ふ。是によつて唐土をさつて日本にわたり肥前の松浦にかくれおりぬ。平戸の長が娘を嫁一人の子をもふけ。唐土和国の夫婦の中に出生したる子なればとて。和藤内と名付ける。此者幼少より力量余の人にこへ成人にしたがひいよく勇猛盛にして軍謀密策尋常のよくおよぶ所にあらず……
「和藤内」の名は「国性爺」に拠るが、それ以外は『闘記』二の十の記述に拠っている。

……一官。名は芝龍。字は微弘。泉州府之晋江県石井之人。父を能騰といふ。兄弟五人。少き時より勇を好で。剛強人に超たり。成長之後。軍謀密策尋常之人の能及ぶ所に非ず。万曆年中に。故有て逐臣と成て。

往て日本肥州松浦郡平戸に住す。

『明朝太平記』がこれを一部和藤内の事として改めたのは明らかである。また、『明朝太平記』で「只あけても暮ても武芸を好み軍書に眼をさらし。兵法剣術を鍛練し。所の若い力量の者共を此寺へよびあつめ。毎日武芸の稽古。」（二の一）という和藤内像は、『闘記』の「本より任侠を好み。兵法を事としける間。数度人衆を分て。工拙を試る」

(三の六) という国姓爺と非常に似通っている。「国性爺」に見える血気の勇者という和藤内の性格は後退した。

2 甘輝の人物像

甘輝についても『明朝太平記』(三の一／上段)と『闘記』(四の四／下段)を比較したい。

五常軍甘輝は元漳州府の人盛才明語にして勇猛人に超たり。よく弓を射馬に乗軍法を学びて四夷の事に通ず。暫く韃靼にしたがふて人の心をうかゞふ。興化府の九僊山にのぼつて何仙廟にいのることありしに。夢中に不思議の事を見たり金鳥飛で南海に入車輪となつて北山にむかふ。甘輝つくくく靈夢の心を占に金鳥は日輪天子の象なり。南海は福健省上は福寧下は万安興化泉州漳州に至

爰に漳州府之人甘輝と云者有。盛才明語にして。勇猛人に超たり。能く弓を射馬に乗。軍法を学て。四夷之事に通ず。弘光年中に。出て森官に仕へ。翌年提督征討諸軍事と成ル時に興化府之九仙山に登つて。何仙廟に祈る事有しに。夢中に不思議の事を見たり

金鳥飛入南海
為車輪向北山

又云

官当至崇明

寿亦至崇明

る迄。皆是中原より南にあたり。かならず予ひとの明君を守立奉つて北にむかつて南北両直を打とり。二たび大明を興すべきの吉夢なりと。心中によるこばしく再拜して下向しぬ。

甘輝夢醒て。つくくくと靈夢之心を占ふ。金鳥は日輪。天子之象也。南海は福健省。上は福寧より。下は懷安万安興化泉州漳州府に至る迄。皆是中原より南に当れり。今上皇帝福健に於て。位に即鎮座しおはします。森官此君を守立奉て。車輪を転ずるが如く。北に向て。南北両直を打取。再び大明を興すべきの吉微なり。

靈夢については長谷川が指摘した箇所であるが、両者の密接な影響関係は明らかである。其積は甘輝を元来大明再興の野望を抱き、その目的達成のために韃靼に内通する者であると明確に設定した。これが「国性爺」との相違である。

3 三段目の改変

「国性爺」の甘輝も、和藤内母の協力要請に対し「望む

所の御頼み」と言う以上、韃靼王に仕える現状に満足していないような素振りが窺える。しかし快諾するかと見えて保留するのは、母でなくとも「そりや御ひきやうな詞がちがふ」と思わせる。甘輝は「和藤内が月代首つきしろひつさげて来らんと。広言はきし某が。……（中略）……女にほだされ縁にひかれ腰がぬけて弓矢の義をわすれしと。たつたん人の雑口にかけられんは必説。しかれば子孫末孫の恥辱のがれがたし」と言う。この場合の恥辱とは、勇士として妻の縁で「弓矢の義を忘れ」たことなのか、あるいは従来野蠻視していたはずの「韃靼人の雑口」にかかることなのか。

「和藤内の月代首」云々の広言も、その時点では甘輝の本音ということになる。そうだとすれば「義信の二字を額に当さつはりと味方せんため」と、妻に死を迫る甘輝の言葉は、確かに本文にも「理非をかざらぬ」と言う通りであろう。これは是非善悪を問うべき問題ではなく、「義理」の名を借りた甘輝の「情」の問題である。和藤内に向い「女房の縁といへば猶ならぬ」と言う言葉に、甘輝の本音が透けて見える。こうして見ると「国性爺」の甘輝は、その性根にやや曖昧な印象が残る。もちろんそういう甘輝がより人間的であるとする評価も可能であり、また私の体験からしても観劇中には特に疑問は起きない。和藤内らにとつても甘輝が味方するか否かが問題であり、まして城外で待つ

和藤内は甘輝の心理を知る由もない。そして錦祥女の自害が事態を一举に収束し、更なる母の自害に観客も眼が奪われる。よって演劇として見た場合、これが欠点であると言つつもりは全くない。ただし作品として読む場合には、甘輝が主要な人物であるだけにやや物足りなさが残るのは私だけであろうか。

一方「明朝太平記」において其積は極めて周到であり、この箇所は彼の特徴をよく示している。甘輝の他出中、老一官らとの再会を悦ぶ錦祥女の口から「つれあい甘輝は心のふかい人にして一世が聞つれそへばとて。女などに中々大事を打あけては申されぬ人なるゆへ底の心は存せぬ共……（中略）……直に対談なされなば意内は大かたしれ申さん」と言わせる。帰館した甘輝は、和藤内一行に向つて開口一番「某は只今韃靼の大王の幕下に属し。高禄を請たる身大明の余類はさがし出して註進し奉公を仕らねばならぬ我等をのくも聲が手柄にもなりさふなる事候は、仰聞られ給はれ」と、一行の要請を聞く以前に遮る。そこで老一官が躊躇していると、和藤内が野蠻な韃靼人に仕えるような者とは義絶すると息巻く。困惑した錦祥女が間に入つて取り成すが、甘輝は、本物の和藤内一行ならば韃靼王に差し出すが、贗者であろうから帰れと言う。「国性爺」で葛藤の原因となった妻の縁云々といった発言は全くしていないの

である。つまり甘輝はあくまで、野望を抱いて韃靼の祿を

食むという真意を安直に他人に洩らさない慎重さと、妻の

縁者である一行を逃がそうとする寛容さを見せている。こ

こでも甘輝は韃靼王から和藤内の捕縛命令を受けたとし、

「此甘輝が片腕にてひつつかまへ。父子共にいましめて参

らすべしと広言吐し某なれば。」と言う。しかしこの場合

は、あくまで甘輝が韃靼王に忠誠を尽くすと見せかけて油

断させるための言動として、読者も納得できるのである。

それを悟った一官が甘輝の芳志を感じていると、和藤内は

すかさず、心底は呑み込んだが思宗烈皇帝の弔い合戦は早

い方がよい、時機を逸すると韃靼の勢力が増して困難にな

る、と忠告し、二人の協力関係が成立する。また『明朝太

平記』では母は全く活躍せず、逸る和藤内を諫めるのも老

一官の役割に仕替えている。縄付きの母が、錦祥女を殺そ

うとする甘輝を食らい付いて留める「唐猫」の件は、「国

性爺」の舞台では非常に映える。近松や杜口が指摘する、

人形の働きを重視した文飾である。しかし草紙でそうした

緊迫感や動的効果を出すのはなかなか困難であろう。また

「国性爺」における母の遺言「だったん王は面々が母の敵

妻の敵と。思へば討に力有。気をたるませぬ母の慈悲」は、

見方によっては大明再興の動機付けを単なる私憤に墮する

ものでもある。『明朝太平記』の方向性とは齟齬するため、

あえて採用されなかったものか。

4 演劇と浮世草子の間

以上のような改変の理由を、単に「国性爺」の二番煎じ

を避けたというだけでは説明できないと思う。其積が、舞

台で観客の視覚に訴える「国性爺」中の場面を『明朝太平

記』では省略ないし圧縮していることは既に指摘がある。

三段目で言えば、獅子が城楼門で錦祥女が鏡に老一官の姿

を映し、形見の絵姿と比べ実父と知る場面もその一つと言

えよう。ここは『難波土産』巻四「国性爺合戦」評に「理

のくらし書やう也」と記された箇所である。夜中月光で鏡

に顔が映るはずがない、として「此段はなはだいぶか

しく」とする。しかしこの場面も、実際上演中には観客

が特に不審に感ずることはない。むしろ舞台上の楼門が目

を引き、父娘の情味溢れる見せ場の一つである。それに対

し草紙の場合、「理のくらし」趣向や行文があれば、欠点

として読者の目に付くのが常であろう。娯楽本とは言え、

浮世草子の読者層は中流以上の町人がほとんどである。淨

瑠璃や歌舞伎を忠実に草紙化するだけでは効果が薄く、読

者を納得させられないことを其積はよく心得ていたと私は

思う。

六、「明朝太平記」と「後日」の関係

『明朝太平記』の後半部分は「後日」を大幅に改変している。其積自身が『野傾髪透油』京之巻に言う「後日」の不評もその一因であろうが、何より「後日」と「国性爺」との趣向の重複箇所などを整理・省略したためである。そして国性爺と甘輝の不和と和解、老一官の自害、甘輝と万礼の協力、の大筋を採った。

「後日」における国性爺・甘輝不和の原因は、甘輝が石門龍の姦計に乗せられ国性爺の日本風に反発したことにある。それにしても「日本の勇者異国の義者」と言われる両者の捨て台詞を遺しての決裂は、石門龍でなくても「まんとくらふて。追出すかんきもかんき立のく汝（＝国性爺）も汝。ちゑなしのあつまり。」と思わせなくてもいい。其積は「後日」での甘輝と梅檀皇女の婚礼を、呉三桂のことに仕替えた。呉三桂が甘輝に書簡で、皇女と密通する国性爺が自分を闇討ちにする計略を知り身を引く旨を通知する。甘輝から忠告された国性爺は身に覚えがなく激怒、九仙山に呉三桂を訪ねると、それは佞臣による謀計で、自分は亡妻柳歌君を想い再婚の意志なし、と諭される。一方甘輝から国性爺の不行跡を聞いた老一官は謀計を察知、石門龍の部下に耳の遠いふりをして近づき、下知文を壁に書か

せて筆勢の類似から呉三桂の偽筆者と見破り捕縛する、という凝った展開を見せる。「後日」で影の薄い呉三桂を手くストーリー展開にからませ、老一官にも『鬪記』に見える武人としての一面を付与するなど、其積の工夫が窺われるところでもある。

また『明朝太平記』巻五では、錦祥女、養父陳芝豹（「後日」では甘輝の叔父）、韃靼王の嫡子阿克商に仕える実子万礼の葛藤を描く。万礼は阿国商から、国性爺を誘き寄せるため老一官を捕縛せよ（『鬪記』四の一による）との命を受ける。錦祥女は、一官を差し出せば養父に非義者の悪名を立てる事になると、道理を正す。『明朝太平記』の錦祥女は、総じて理に聡い賢明な女性として描かれ、「国性爺」における情に厚い錦祥女とはまた違った趣きがある。大明方に協力せよと言う芝豹に対し、阿国商への恩を思う万礼は悩んだ末、「大明方の者を一人惣名代に」召し渡すという妥協策を出す。老齢の一官が自ら首をはね、万礼は首を器に入れて阿国商方まで下人に運ばせる。途中で偶然下人と行き会った甘輝は、下人を脅して自分の部下にし（「国性爺」千里が竹で安大人らが国性爺に帰順する段に着想したか）、首を獄門に掛けられては、国性爺に対し一分が立たないと万礼に詰問する。自分の軽率さを悟った万礼が死を覚悟すると、芝豹が身代わりに自害、甘輝と

万礼は和解する。「後日」では、羊を殺して料理の準備をする芝豹の妻を甘輝が誤解して殺害し、万礼妻を谷底へ蹴落とす。「忠義かへつて不忠と成」った甘輝の苦悩を描き、英雄とは言え人間の弱さを出そうとする近松なりの意図は理解できる。やはり人形の働きを重視した箇所でもあろう。しかし文章として読むと、やはり武将としてまして女性相手に「そこつとや申さんおくれたりとや申べき」との感が強いのである。其積はこの件を取らず、「国性爺」三段目の甘輝らの葛藤をこの場に仕替えた。一官と芝豹の自害が一挙に困難を打開するのは、「国性爺」の錦祥女と母の自害の格である。しかし、この場合国性爺・甘輝・万礼共に大明の旧臣であった父一官と芝豹の遺志を継ぐという大義名分が立つ。以上、『明朝太平記』はやや理屈に勝る展開ではあるが、大明方の人物が困難な状況の中でもあくまで道理を貫こうとする姿勢を丁寧を描いている。これが杜口の言う「人情をよく書きこなす」というところであろう。特に全編を通じ、思慮深い甘輝像を首尾一貫させる意図が看取される。

七、『閩記』の構成と『明朝太平記』

『閩記』が『明朝太平記』に与えた影響は多大なものである。本書は従来「国性爺」・「後日」の典拠としてしか言

及されないが、より注目されて然るべき軍記である。『明朝太平記』跋（句読を私に補う）に

奇正の術は和朝の楠正成か謀を宗として、勇猛の力業は弁慶朝比奈が勢ひを凌げり。爰に長崎にひとりの人あつて、書になき国性爺が異朝にての手柄ばなし、

今日前に見しごとく語りぬるを、其まゝ是に書加へて……

とある。国性爺を楠木正成らに比する発想は『明朝太平記』の書名から明らかであるが、長崎住の老人の話を基にした、と仮託するのは『閩記』の存在を暗示する言ではないか。

さらに其積が『智恵鑑』を利用して詭計を描いたとされる箇所も、実は『閩記』に見えるものがある。『明朝太平記』三の二には国性爺の軍略が幾つか描かれる。燕の楽毅の故事を引き、攻め急ぐより敵の疲弊を待つ、という箇所は、行文は『智恵鑑』八の二によるが、『閩記』五の一「国姓爺拔漳州府城二事」に載る。また煮豆を入れた竹筒を腰につける箇所は、同じく『智恵鑑』八の十一に拠るが、『閩記』九の二「官軍拔崇明関二事」に見える。梅勒王の火牛の謀計を国性爺が撃退する箇所は『智恵鑑』八の廿四・廿五に拠るが、『閩記』二の六「火牛蒸鷄事」にも「火牛」の計略が載る。『明朝太平記』が好んで国性爺の詭計を描くのは、何より『閩記』の戦闘場面の影響を見るべきではないか。前掲箇所も『閩記』の記述に触発され、『智恵鑑』

で補ったのではないかと見られる。こうした点にも其碩の周到さが窺えるのである。軍記の類は『太平記』も含め、一章を立てるなどして中国の故事を長文にわたって記す場合が多い。そうした挿話は作品に過去の歴史に照らすという重厚さを与える効果がある。一方でストーリーの進行を妨げ、緊張感を削ぐきらいもある。その点其碩は、作中に違和感なく簡略に故事をはめ込むことに成功している。

八、「明朝太平記」の意義

『明朝太平記』は「国性爺」ブームに触発されて書かれた作ではあるが、細部は描くとして全体としては「国性爺」・「後日」のパロディ的な可笑しさや、やつし的な好色味を狙ったものではない。この点において他の国性爺物の浮世草子類と異なり、また従来の長編浮世草子に比しても新機軸を出し得ていると言える。私は享保二年正月刊『明清軍談国性爺忠義伝』⁽³⁾の存在も、其碩を刺激したと考えている。通俗軍談流の戦闘描写や詭計に影響を受けつつ、武将など人名の羅列等の煩雑さを避け、浮世草子流の滑稽さを加味した所に『明朝太平記』の意義を見出すべきであろう。其碩の時代物は演劇翻案作が大多数であることは事実である。しかし演劇を意識するからこそ単なる場面のはめこみを避け、草紙としての独自性・一貫性を打ち出そうと腐心した

のだと思われる。

注

(1) 『浮世草子の研究』第五節二「国性爺明朝太平記」(昭和四十四年初版 桜楓社)。以下「智恵鑑」の剽窃箇所など、長谷川の言説はこれによる。

(2) 他にも「国性爺」後日」にはなく「鬪記」に載る中国人名や「大星所」なる城の名前を、其碩が『明朝太平記』で使用する等の箇所が幾つかある。『明朝太平記』冒頭章、崇禎八年の重陽の儀式は「鬪記」冒頭章に、『明朝太平記』六の二で万礼が「火浣布」の説明をする件は、「鬪記」四の五に国性爺の拝領品を説明する箇所による。

(3) 西沢一風作とされる『国性爺御前軍談』に「……『明清寇記』と申を近松氏がつくりなをし」と言及がある。これに注目した野間光辰が『国性爺御前軍談』と『国性爺合戦』の原拠について、『明清鬪記』と近松の国性爺物(『近世芸苑譜』所収 昭和六十年 八木書店刊)にて、『鬪記』の成立事情や「国性爺」後日」との関係を具体的に考察した。『鬪記』は渡来人の末裔で長崎住の前園仁左衛門増武が中国人から入手した情報を基に執筆し、石斎が校閲して成った。

(4) 黒石陽子「国性爺合戦」考——三段目の老母像を中心に——(『言語と文芸』一〇二 昭和六十三年二月号)・「国性爺合戦」試論——老母像造形の意味——(『歌舞伎——研究と批評——』創刊号 昭和六十三年八月)。この老母に「王陵の母」等「列女伝」に見える慈母の影響があるとする指摘には賛同できるが、其碩作の赤穂義士物『忠臣略

- 太平記」(正徳二年刊)一の三、木村源三の母の自害に「王凌」の母の犠牲を翻案している。息子の大望を後押しして自害する母親像には、これがヒントの一つになった可能性がある。
- (5) 長谷川が大坂の芝居で虎が二匹登場して好評という「野傾髪透油」(享保二年四月刊)の記述に注目、「明朝太平記」二の二はこれにより、ここに卞莊子の故事を出し和藤内が兵機を悟るのは「智恵鑑」七の十三によるとする。ちなみにこの両虎の故事を『明朝太平記』四の二で呉三桂の偽簡の文句に再度用いているが、こちらの行文は作者未詳の八文字屋本『頼朝三代鎌倉記』(正徳二年序)四の三によったと見られる。
- (6) 「義太夫年表」「国性爺後日合戦」の項。また「髪透油」京之巻によれば布袋屋座・都万太夫座ともに「後日」は不当たり、前者は「国性爺前後合戦」として初めを入れたため少しはよく、後者は浄瑠璃と変えて万礼役を甘輝に仕替えるなどしたが、当たり見えずという。
- (7) 注(1)参照。
- (8) 本書が儒者にもよく読まれたことは塚本学「江戸時代における「夷」概念について」(『近世再考』所収 昭和六十一年日本エディタースクール出版部刊)注(26)に指摘がある。石斎が関わった成立事情も手伝い、史書と見なされたと推測される。また『難波土産』巻四「しぎ蛤あらそひ」の注釈に「是はもと……」として、呉三桂と李自成を戦わせ消耗した隙に両者を討伐する韃靼の計略を、「国性爺」に仕組むとする。この故事は『戦国策』に出る有名なものだが、「国性爺」が直接には『鬪記』二の八によることが、当時すでに理解されたことが興味深い。
- (9) 本書については拙稿『明清軍談国性爺忠義伝』をめぐっ

て(『国文学研究』八十五 昭和六十三年三月)参照。作者未詳ながら、複数の白話小説の翻案になる早期の作として注目される。むしろ李自成や鄭芝龍の活躍が顕著で、外題は「国性爺」ブームに乗ろうとする書肆の意向であろう。『日本古典文学大辞典』「明清軍談通俗国性爺忠義伝」の項に『鬪記』と直接の影響関係はないとするが、やはり皆無とは言えない。一例だけ挙げると、巻十四の二は国性爺号を下賜された鄭森が函輝・万礼と出会う場面だが、国性爺が居並ぶ將軍と水牛をめぐって力比べをする箇所は、明らかに『鬪記』四の五を意識している。